

名古屋女子大学

8号

## 総合科学研究所だより

Research Institute of Human Ecology, Literature and Education

## 巻頭言

総合科学研究所主任 渋谷 寿  
SHIBUYA Hisashi

「総合科学研究所だより」は、総合科学研究所の事業内容や所員参加の機関研究、学際的なプロジェクト研究の進行状況や成果を紹介することが大きな目的です。これらの事業は、運営委員、所員として研究に参加いただいている先生方のご協力のもとで力強く展開しています。社会的・経済的にも大きな変化の時代を迎えつつある今日、新年度を迎えた総合科学研究所の事業は、より、本質が求められることになると考えられます。その意味でも、質の高い研究をサポートするという研究所の重要な役割を再認識しています。

1年を振り返ると、研究所として幾つかの大きな成果がありました。まず、「大学授業法の研究4」では、初年次教育のテキスト(案)が完成しました。また、次年度は、学生の成績評価に関する検討が始まります。これは、大学教育における未来を見据えた

重要な研究になると思われれます。

次に、「開かれた地域貢献事業」では、本学「和春寮」の近隣に新築されました名古屋市瑞穂児童館・瑞穂福祉会館と社会福祉協議会という公的機関との連携で行いました。この事業での「遊びに関するイベント」は、子どもからお年寄りまでが楽しめる、地域に根ざした遊びや玩具作り、福祉に関する事業となり好評でした。

更に、名古屋女子大学中学校・高等学校における学力向上に関する研究の充実を挙げなくてはなりません。中学校における先生方の学力向上に関する研究意欲は今まで以上に熱気を帯びており、高等学校では集中的な公開授業と研究会が開催され、両者ともに大きな成果が期待されます。今後より一層、大学教員との有機的な協力体制が可能になれば、中高大が連携した本学独自の教育研究体制が推進されます。

この他の研究に関しても大きな成果を上げた1年でしたが、来年度も、総合科学研究所が時代を先取りした指針を生み出す研究機関となりますようにご協力をお願いいたします。

機関研究報告

## 「大学における効果的な授業法の研究4－初年次教育についての授業法の開発－」

◎遠山佳治・石倉瑞恵・伊藤太郎・宇野民幸・下木戸隆司・白井靖敏・竹尾利夫・谷口富士夫・原田妙子・幸 順子

平成18年度から始まった本研究は、初年次教育における全国的動向の分析から始まり、総合科学研究所主催の講演会に初年次教育に関するテーマを3年連続で取り上げました。また、平成19年度新入生アンケート調査を前期・後期と2回実施して、学生のニーズおよび学力を正確に把握し、学内で中間報告会を開催しました。そのアンケート調査の詳細な分析に基づいて、本学用の初年次教育テキスト案作成に着手しました。その研究成果が認められ、本学各部署で加筆修正された完成版が、全学的取り組みとして来年度(平成21年度)新入生向けに印刷・配付されることとなりました。

初年次テキスト『大学で学ぶということ』は、「建学の精神」「名古屋女子大生としての意味」「授業の種類」「さまざまな先生」「学内ネットワークの使用方法」「授業の受け方」「授業の予習・復習＝自習」「課題への取り組み」「試験対策と授業の成績」「生活と学習計画」の10章で構成されています。大学とはどういうところなのか、大学の授業やテストはどのように行われているのか、またどのように対応すればいいのか、何のために大学で学んでい

くのかなど、新入生の不安感を少しでも取り除き、すぐに大学における快適な学習生活を送れる手助けになるものと思います。

この3年間の研究活動の総括として、アンケート調査の分析、テキスト案の内容、初年次教育の課題と展望などを『総合科学研究所』第3号にまとめましたので、ご覧いただきたいと思います。

(文責:遠山佳治)



＜初年次教育テキスト『大学で学ぶということ』＞

## 機関研究報告

## 「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

◎丸山竜平・伊藤太郎・木原貴子・遠山佳治・羽澄直子・依岡道子

本年度の研究は昨年度に引き続いてのもので、個別研究を継続し発展させていくなかでメンバーが共通認識に立ってテーマを大きく括り一本化できる柱を模索することになった。このため原則月一回の個別研究発表会を実施し、相互の研鑽と研究の推進を図った。

いずれの発表も昨年度の研究を踏まえてのもので、研究分析の対象を同一範疇の中でスライドしつつも基本的な研究方向は変わることがなかった。このためより高次となる20年度の課題とテーマはそれぞれ以下のものであった。

## 1) 丸山竜平「創立者越原春子と越原の歴史」

戦国時代から江戸時代にかけての越原家の歴史と山間地・越原の歴史を考察し、越原春子の人格形成の根幹を問うた。

## 2) 遠山佳治「名古屋女学校・名古屋高等女学校時期における建学の精神および教育理念の一考察(2)―「女学講義」について―」

越原春子がテキストとした通信教育講座「女学講義」ならびにその発行元である大日本女学会の詳細な内容分析を進めた。

## 3) 伊藤太郎「なぜいま女性原理なのか～西洋的「近代化」のプロセスを辿って～第2報」

英国の「近代化」に男性原理の「負」を見出し、なぜいま女性原理の復権かを検証した。

## 4) 羽澄直子「女子高等教育と社会活動」

19世紀末から20世紀にかけての、アメリカの高等教育を受けた女性の社会活動を通して、「ニュー・ウーマン」の時代を考察した。

## 5) 木原貴子・依岡道子「19世紀のイギリスにおける女子教育～少女雑誌『ガールズ・OWN・ペーパー』に見られる初期の教育観～」

イギリスで出版された雑誌『ガールズ・OWN・ペーパー』から、19世紀末～20世紀初め(大正期に相当する時代)のイギリスにおける女子の高等教育観を考察した。

(文責:丸山竜平)

## 機関研究報告

## 「幼児の才能開発に関する研究」

～幼児の育ち合いを促す保育実践～

◎幼児保育研究グループ

今年度は、幼児の異年齢交流・仲間・自然・実体験等をキーワードとした、その育ち合いを促すための保育実践を中心に研究を進めています。異年齢交流は、日々の取り組みが子どもたちの心の育ちを導き出し、人に対する気持ちの育ちへと結びついていくものです。5歳児は、3歳児に向けてクラスの皆で遊ぶことのできる『おもちゃ』の製作を行いました。アイデアを出し合い、ルールを考え、いかに3歳児が理解して楽しめるものを作ることができるか。5歳児の工夫にあふれた『おもちゃ』は、3歳児にとっても魅力あるものになりました。また4歳児は、リズムや運動あそびの中で、友だちを応援したり、だれとでもすぐに仲間づくりする気持ちの広がりが見られます。子どもたちの、相手の立場に立って物事を考えていく姿勢とその取り組みは、日常での交流から育った心の成長のひとつであると考えられます。さらなる深まりを求めた実践を検討中です。

(文責:森岡とき子)



輪なげあそび  
—5歳児の応援の中で楽しむ3歳児—

## 機関研究報告

## 「中学生の学力向上に関する研究」

～新学習指導要領の本校教育への展開～

◎中学校学力向上研究グループ

今年度の研究活動は3度の公開授業と研究発表会に伴う研究授業、そして夏期研究合宿を中心として進めてきました。成果として、①新学習指導要領の本校教育への展開についてさまざまな角度からのアプローチを模索することができたこと。②夏期研究合宿での3日間にわたる集中協議を通じて、新要領の趣旨を各自の授業づくりに生かしていくための示唆を得ることができたこと。③昨年度来研究を続けてきた本校道徳教育の全体計画に関して素案を提示することができたこと。以上の3点が挙げられます。今後は、新要領の本格実施に向けた更なる授業研究と、3学年の発達段階に応じた系統性を更に明確にした道徳の全体計画作成が課題となります。

(文責:福田 誠)



中学校教育研究会 公開授業

## 機関研究報告

## 「高校生の学力向上に関する研究」

高等学校の研究活動において取り組むことにしたのは、大学入試でも通用できる確かな「学力」の向上です。「大学が求めている学力とは何か」を明らかにすることによって日常の授業の内容を、主体的な学びや表現力の向上、問題解決能力や課題設定力などを培いながら、見つけ直すことが出来ます。今回私たちは、学力向上を進めている他府県の学校の研究会を視察したり、講演を伺ったりして探究すると同時に、研究授業を通して研究を進めていこうと考えました。そして研究会のメンバー全員が、次の研究会のいずれかに派遣され、全国から集まった教員たちと情報を交換しながら、自らの授業を振り返り、参考にすることが出来ました。

◆京都市立堀川高等学校 ◆筑波大学付属駒場中・高等学校  
◆筑波大学附属高等学校

一方、12月16日(火)には、研究メンバーが時限別に研究授業を行いました。この日に向けて、研究メンバーの教員同士で指導案をたたき合わせ、意見交換をして作り上げることが出来ました。研究授業の各テーマは次のとおりです。◆長谷川聡教諭「生徒自ら課題を追究する授業づくり」◆加太良枝教諭「グループ発

◎高等学校学力向上研究グループ

表を通して発信の力を養う授業づくり」◆手島恭子教諭「生徒の英文読解力を向上させる授業づくり」◆江本幸司教諭「史料から歴史を読み解く力を育てる授業づくり」◆片岡彌生教諭「文章の構造的理解を深める授業づくり」

1月31日(土)には、今年度の研究の総括として、第2回研究発表大会が行われました。(文責:江本幸司)



第2回教育研究発表大会

## プロジェクト研究報告

## 「ICTを利用した国際交流プログラムの企画・実践とLMSを通じた基礎的支援」

～質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み(その2)～

本研究は、社会的構成主義的教育理論に基づいて開発されたLMS(Learning Management System)の一つであるMoodleを用いた国際交流プログラムの企画・実践に関する基礎的支援についての研究である。Moodleは、「考える力」や「議論する力」および「応用する力」など、社会的構成主義の考え方をベースにした教育実践力を身に付けるのに有効なプラットフォームであることは良く知られている。家政学部教職選択者は、将来、中学校・高等学校等の家庭科教員として、生徒に対し実践的な指導ができる方法と技術を身に付けていく必要があることから、Moodleを利用し学生自身が実践的に学べるよう教員養成プログラムを構築した。具体的には、Moodleにおいて、「International exchange」と「国際交流」のカテゴリーを作成した。

「International exchange」には、「Study(Japanese Only)」と「Mutual exchange of students and teachers」の2つ、「国際交

◎白井靖敏・山口厚子

流」には、「国際交流プログラム推進支援」のコースを作成した。「Mutual exchange of students and teachers」では、実際の交流学習のための「The place to exchange internationally」、「Objectives of this programme」、「What is home economics?」、「The case observation of international learning through Home Economics and ICT」、「Materials and Resources」など、10のトピックを作成した。特に、「The place to exchange internationally」では、日本とシンガポールの協働学習のためのフォーラムを設置し、活発な意見交換がなされている。さらに、協働学習のためのTaskに従って、日本(久居高等学校)とシンガポール(南洋女子中学校)とが、それぞれのチーム(AB)で作成したパワーポイント資料がアップされている。

(<http://gets.sakura.ne.jp/moodle/>)

(文責:白井靖敏)

## 平成20年度 総合科学研究所 開かれた地域貢献事業

## 名古屋市瑞穂児童館・瑞穂福祉会館新館オープニングイベント 「みんなで遊ぼう!一子どもから高齢者まで」

名古屋市瑞穂児童館・瑞穂福祉会館新館が平成21年3月26日(木)に、名古屋女子大学学生寮や中学校・高等学校の近くに開館しました。それを記念して、本学文学部児童教育学科、短期大学部保育学科および家政学部生活福祉学科の有志教員と学生、名古屋女子大学同窓会「春光会」が、地域住民と一体となって、新館オープニングイベントを名古屋市社会福祉協議会、名古屋市瑞穂児童館・瑞穂福祉会館と共催する形で、『地域の子育て支援&福祉活動』を行いました。「キッズゲームコーナー!」

「紙でワン・ツー・スリー!」「いっしょに遊ぼう!」「音を楽しもう!」「ヒノキを使っておもちゃをつくろう!」「リサイクルおもちゃづくり/エコワンダーランド!」「なつかしい思い出に花を咲かせましょう~子どもの頃の遊びの思い出で回想法(懐かしい遊びをしてみよう)」「乳幼児の食育相談・高齢者の栄養相談」の各ブース、大型紙芝居・人形劇と福引き会などの全体催事が行われました。今後も名古屋市瑞穂児童館・瑞穂福祉会館と本学が連携できることを願っています。(文責:遠山佳治)



## 第2回高等学校教育講演会(1月31日)

## 「学力の向上を目指す授業改善の在り方」

講師:工藤文三氏(国立教育政策研究所 初等中等教育研究部長)

国立教育政策研究所の工藤文三先生をお招きし「学力の向上を目指す授業改善の在り方」という演題でお話をいただきました。学習指導要領の改定に伴う学力のあり方、学力向上に向けての取り組みや学力と評価の関係、授業改善の方法など大変参考になるお話を頂くことができました。また、校内研修を行う際のヒントや授業記録についてなど、私達の研究活動においても参考となる内容が多く盛り込まれていました。指導内容ばかりにとらわれ生徒のことを置き忘れた授業にならないよう、生徒の学力の状況と課題を把握して授業を行っていくことの大切さなど、改めて考えることが出来る良い機会となりました。

(文責:坂井健悟)



第2回高等学校教育講演会

## 第26回中学校教育講演会(3月3日)

## 「改革に終わりは無い」

講師:前田隆芳氏(洗足学園中学校・高等学校長)

洗足学園中学校・高等学校長の前田隆芳先生をお招きし、「改革に終わりは無い」として、洗足学園中学校・高等学校におけるさまざまな取り組みをご紹介いただきました。洗足学園は大正15(1926)年創立の歴史ある学校ですが、前田先生が教頭をお勤めの時代に当時の校長先生と共に学校改革に着手され、綿密なシラバスを作成し、それに基づいた効果的な学習指導を展開するようになって以来、中学の人気の高まり急速にレベルアップしたようです。その結果、年々進学実績が上がり、現在では毎年のように東大現役合格者を出しています。講演の中では、洗足学園と本校との類似点などにも触れられながら、洗足学園中学校・高等学校が偏差値32の学校からスタートし、どのような変遷を経て現在に至ったかについて、たいへん分かりやすく丁寧にご紹介いただきました。

講演は主として先生がご用意くださったレジュメに沿って進められましたが、この15年間の学力向上に向けた学校改革の歴史について、具体的な進学先や数字が細かく入った表を見ながらお話をうかがうと、明らかに右肩上がりのグラフを描いて学校全体の学力が伸びていく様子が、まさに手にとるように分かり、教員や生徒の意識改革の例を含め、分かりやすく参考になる話題に溢れた内容でした。

先生は、最後に「強いもの、賢いものだけが生き残ってきたわけではなく、その時代の変化に対応できたものが生き残ってきた。」と結ばれて、学校もその時代や社会の変化に対応していく必要性を強く訴えかけられて講演を閉じられました。本校が今後、学力向上に向けた取り組みを更に推し進めていく上で示唆に富んだ貴重な講演でした。

(文責:福田 誠)

## 平成21年度スタート プロジェクト研究

総合科学研究所では、自然科学・人文科学の専門分野の枠にとらわれず、理論研究または実践活動の振興を目的として、学際的かつ複数の研究者による共同研究を助成しています。選考の結果、平成21年度のプロジェクト研究として次の2件が採択されました。

## ●新任教員の適応及び新任教員研修に関する研究

◎和井田節子・亀山有希

H.16年以降、新任教員の離職率が急激に増大し、H.18年には、1.35%(次世代の教育を考える懇談会・文部科学省・H20.7)となっています。しかし調べてみると、自治体によって離職率に何倍もの差があることがわかってきました。

そこで、新任教員への有効な支援や新任者研修プログラムを探る目的で、愛知県・名古屋市と採用倍率が近いいくつかの自治体を対象に、適応状況およびサポート体制を教育委員会と各学校のレベルで調査検討することにしました。将来的には各自自治体の知恵の共有に貢献するとともに、本学の教員養成の授業にも活かしていきたいと考えています。

(文責:和井田節子)

## ●「情報通信機器を利用した双方向型大学授業の試み」

—教職科目「教育心理学」・リベラルアーツ科目「心のしくみ」における実践的検討—

◎白井靖敏・下木戸隆司

本研究ではミニPC、携帯電話などの情報通信機器を学習者からの質問や意見の収集端末として用い、そこから発信された情報をLMS(Learning Management System)で集約し、液晶プロジェクトリアルタイムで表示する方法の開発を行います。さらに、このシステムを利用して授業中オンラインで学生の反応や理解度を確認しながら授業を進める教授技法や、授業時間外に学生に自主的な学びを促すためのLMS活用方法、及び、そこで行われた学習効果をネットワークを利用して評価する方法について検討します。

(文責:下木戸隆司)

## 今年度運営委員

委員長

遠山 佳治  
TOHYAMA Yoshiharu  
(短期大学部)木原 貴子  
KIYARA Takako  
(文学部)駒田 格知  
KOMADA Noritomo  
(家政学部)白井 靖敏  
SHIRAI Yasutoshi  
(家政学部)谷口 富士夫  
TANIGUCHI Fujio  
(文学部)

## 研究所メンバー

所長

柴山 正  
SHIBAYAMA Tadashi

顧問

河村 瑞江  
KAWAMURA Mizue

主任

渋谷 寿  
SHIBUYA Hisashi

講師

越原 もゆる  
KOSHIHARA Moyuru

職員

浅井 貴子  
ASAI Takako

## 編集後記

ここに総合科学研究所だより8号をお届けします。ご執筆いただきました先生方に感謝申し上げます。

今回、報告させていただきました研究成果や経過の概要は、社会的・経済的にも激変する現代における、重要な問題の解決に向けた様々なアプローチです。教職員の方々がそれらの成果を役立てていただくと共に、今後とも総合科学研究所だよりにご理解とご協力をお願いいたします。

総合科学研究所